

# 厚生労働省 平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業

## (舞台芸術分野)



NPO法人ひゅーるぽん 事業実施報告

# 事業実施内容

- 演劇ワークショップ 全4回（5日間）
- 広島県ヒューマンフェスタへ参加
- 演劇公演 全2ステージ実施
- アフタートーク 全2回実施
- 協力委員会議 全2回実施
- 舞台関係者反省会 1回実施予定

演劇公演



アフタートーク



演劇ワークショップ



# 人材育成

- 舞台芸術担当スタッフの設置  
(専従スタッフ1名・非常勤スタッフ1名)
- ファシリテーターの育成 (4名)



# 調査・研究・評価・発信

- 福祉分野に特化せず、幅広く参加者・観劇者を募ることで作品の芸術的な評価を高めた。
- アートサポートセンターのホームページならびにフェイスブックにて、センター概要、舞台芸術に関する情報等について随時発信

※調査・研究については今年度の事業では実施していない。

# ネットワークづくり

- 昨年度と今年度のワークショップなどを通して繋がった、演劇関係者、障がいのある人や子どもたちを支える人、保護者・家族、一般の参加者などで、舞台芸術関係者の会議を行い、今後の活動や運営についての意見交換を行う（3月実施予定）

## 協力委員会会議

福祉施設分野、権利擁護分野、美術分野、演劇分野、行政分野それぞれの専門の委員により、事業に対して意見交換などを行い、事業運営を進めていった。

（実施内容）

第1回 事業計画・内容・体制についての意見交換（8月実施）

第2回 事業統括会議（3月実施）

# 都道府県との連携

- 広島県ヒューマンフェスタ（人権週間記念行事）において、作品の一部をリーディング形式で発表した。
- 広報活動への協力（広報誌「ひろしま 市民と市政」での広報など）
- 広島県との共催で、演劇作品「ウタとナンタの人助け」の再演を行った。（広島市市民交流プラザで2月実施）



## 参加型公演（参加者数）

		障がい者※	その他一般	スタッフ	合計
9月11日	舞台芸術ワークショップ①	13（1）	4	6	23
9月16日	舞台芸術ワークショップ②	15（1）	7	3	25
10月14日	舞台芸術ワークショップ③	12（1）	10	5	27
11月17日	稽古①	14（2）	9	5	28
11月25日	稽古②	11（2）	8	4	23
11月26日	稽古③	13（1）	9	3	25
12月3日	稽古④	12（2）	9	3	24
12月9日	広島県ヒューマンフェスタ	14（1）	10	4	28
12月16日	稽古⑤	12（2）	9	4	25
12月21日	稽古⑥	11（2）	6	6	23
12月22日	舞台芸術ワークショップ④・稽古⑦	12（2）	6	5	23
12月23日	舞台芸術ワークショップ④・稽古⑧	12（2）	10	6	28
1月6日	練習会⑨	10（2）	9	6	25

※（）内は身体障がい者数

**合計327人**

## 演劇公演観客数

		一般	高校生以下	招待	スタッフ	合計
1月13日	本公演 ゲネプロ					60
	本公演 本番1回目	39	13	5	1	58
	本公演 本番2回目	43	2	11	3	59

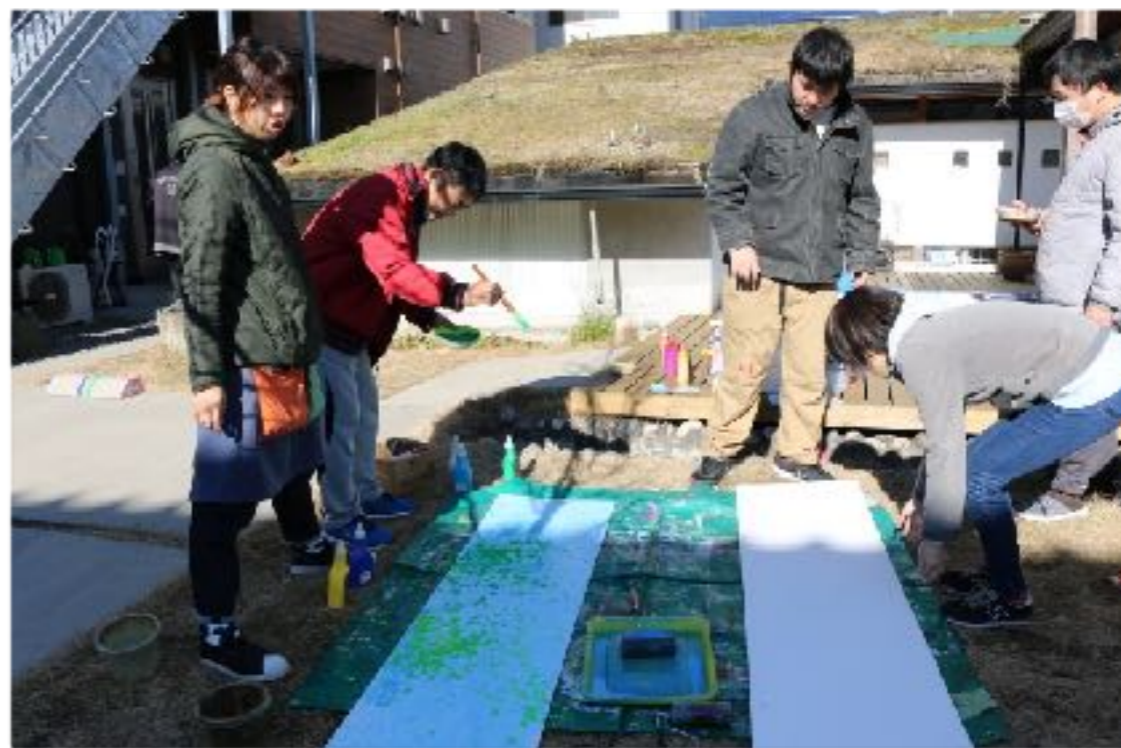
**観劇者合計 177名（動員率98%）**

		合計
2月18日	再演版「ウタとナンタの人助け」	112

**（動員率100%）**

# 美術分野との連携

舞台美術と小道具の製作を地域支援活動センター「ぽんぽん」と共同して行なった。



# 観劇者アンケート

## (一部抜粋)

●作品内容にも感動して涙が止まらなかったです。私自身、弟が重度の知的障害があります。障がい、健常関係なく支え合っている出演者の方々にも感動しました。たくさんの人に見て頂きたいと思いました。(30代女性)

●演劇の力を逆に思い知らされるようでとても愉快、痛快な取り組みかと思えます。他の地域にも回れると良いのではないのでしょうか。とても良かったです。(大阪・男性)

## まとめ

作品の内容だけでなく、チームの関係性や企画自体についても共感・感動を得られた。また、他地域での公演を提案する声もあり、舞台芸術作品としても高い評価を得ることができた。

## 課題

舞台芸術作品の特性として、観劇者数を増やすことには限度がある。劇場に足を運んでいただくこと以外に活動を広めていく方法を考える必要がある。



# WS・公演参加者アンケート

(一部抜粋)

- 障がいを持った方や年齢やキャリアの違う方と芝居を作る中で、自分の芝居を見つめなおすことができた。
- 色々な体の状態、心の状態の方と、1つの作品を作り上げる事がとても楽しかった。今まで立たせてもらった舞台の本番より、一体感、安心感を持って演じることができた。
- 稽古の回数が少ないと感じた。お金も時間も少ないが、稽古時間を十分にとる工夫ができたらいいなと思った。

## まとめ

**出演者の年齢や、所属する機関は多様であり、広島で演劇活動を行なっている俳優にとっても、豊かさのある公演となった。**

## 課題

**仕事や学業など、それぞれの活動も抱えながらの公演のため、全員集まったの稽古時間は少なかった。減免利用ができる施設のうち、発声や楽器の演奏が行える施設には限りがあり、稽古場確保に苦心した。**

# 支援者（保護者）アンケート

（一部抜粋）

- 特別な事をしている、わくわく感や緊張感やドキドキ感を日頃の態度の中にも感じた。
- 自分が出ない時の待ち時間最初はその場で、ある程度すると家に帰った後痲痺が出ていた。練習の前後の時間を調整しながら少しずつ慣らしていくことで、負の感情のコントロールができるようになり、それが本人の自信につながった。
- 時間が遅すぎる。保護者の送迎の負担が大きい。

## まとめ

長時間の稽古に参加し、公演に出演できたことが本人の自信につながり、また、非日常を楽しんでいる様子が家庭内に伝わっている。

## 課題

出演者が稽古時間の不足を感じている一方、保護者にとっては稽古時間の長さや送迎が負担になっている。

# 事業所スタッフ※アンケート

(一部抜粋)

※個人で参加した出演者のほか、事業所単位で参加をした出演者の通所する事業所スタッフに実施したアンケート

- 演劇の感想を全員に聞くと、みんなの前で発言するのが苦手な子も自分なりの言葉で伝えようとする姿が見られて嬉しかった。
- 誰もが劇団の一員として自分の力を発揮していた。障がいのあるなし関係なく、一人の人と人として理解しあい関わり合うこと、認め合いお互いの力を生かすことが自然にできていて、全体で心の繋がった一つのチームが出来上がっていた。そうしてみんなで一つの本格的な（福祉的ではない）作品を作り上げていたのは期待以上だった。
- 一回あたりの練習が長時間で夜遅い時間もあったので、本人たちの集中力と次の日の仕事を考えた時に、家族も含めてどこまで背中を押して参加を促すべきなのか最初は迷った。

## まとめ

公演に出演した通所者だけでなく、公演を観劇した通所者の様子にも変化があった様子が伺えた。稽古時間や保護者とのやり取りについて難しさもあった。

## 課題

参加する前に抱えている不安が大きく、参加を進めるべきか戸惑っているスタッフも多かった。

→事前の説明や、悩みを共有できる場をもつ